

観天 望気

日本産のワイン

日本人のワイン消費量の大半は海外からの輸入ワインで、日本国内で栽培した原料ブドウを日本国内で醸造する「日本ワイン」のシェアは、まだ1割にも達していない。が、長野県や北海道を筆頭にいま全国で加速する小規模ワイナリー新設の動きは、ワイン農業が有望な次世代産業として認知される時代の到来を予告している。

今年はスタートから誰もが想像していなかった展開となり、ワインの業務用市場は飲食店の休業や時短で縮小し、観光ワイナリーは顧客激減で大きな打撃を受けた。が、ステイホームで家飲みが増えたため、通販市場は好調に推移している。もともとワインは家で飲むものであり、これを機会にワインへの理解が一般に浸透することが期待される。海外ワイン産地の苦境が伝えられるなか、コロナ禍により日本の産品や国内の観光地が見直される傾向は、中長期的に見れば日本ワインの伸長に寄与するだろう。

地域にワイナリーが集積することで新しいワイナリー観光が生まれ、飲食業や宿泊業を巻き込んで地域経済が活性化することは、すでに世界の多くの国や地域で実証済みである。コロナ禍と人口減少時代への視点から見直される農業ベンチャーへの投資が顕在化すれば、裾野の広いワイン産業が一気に新しい時代の主役として注目される可能性は小さくない。

リモートワークが広がって地方への移住が関心と呼ぶ一方、オンラインの試飲会や販促イベントが、既成ファンの枠を超えて新しい顧客層を開拓する効果をもたらしている。デジタル技術を応用したさまざまな革新は、「世界でもっとも古い農業」であるワイン農業が「土と太陽をメディアとした、地域の価値を表現するアート」であることを教えてくれるはずだ。

そのためには、栽培にも醸造にも経営にも、また地域の行政や周辺産業にも、若い世代の積極的な参加が求められる。



玉村 豊男

エッセイスト・画家・ワイナリーオーナー

たまむら とよお

1945年東京都生まれ。71年東京大学フランス語フランス文学科卒業。91年長野県東御市に移住し、ハーブや西洋野菜を栽培する農園「ヴィラデスト」をオープン。2003年に果実酒製造免許を取得し、「ヴィラデスト ガーデン ファーム アンド ワイナリー」を経営。「信州ワインバレー構想推進協議会」会長。